

三笠版
現代世界文學全集

23

トオマス・マン

魔の山

Ⅰ

佐藤 晃一 譯

三笠書房

三笠版
現代世界文學全集

23

魔の山 I

昭和三十二年七月二十五日印刷
昭和三十二年七月三十日發行

定價 參百五拾圓
地方賣價 參百六拾圓

譯者 佐藤 晃 一

刊行者 竹 内 富 子

東京都千代田區神田神保町二

刊行所 三 笠 書 房

東京都千代田區神田神保町二ノ二〇

電話 九段(33)六五〇四番

振替口座東京二二〇九六番

落丁、亂丁のものはお求めの書店又は本社でお取替致します。

目次

第六章

變化	五
もう一人	三
神の國家と邪惡な救済	三
激怒。それになんとも堪えがたいこと	〇
攻撃と撃退	五
精神的修鍊 (Operationes spirituales)	二
雪	二
兵士として立派に	一七

第七章

濱邊の散歩	三
ペエペルコルン氏	三九

トゥエンティ・ワン遊び (Vingt et un)	三六
ペエペルコルン氏 (續)	三七
ペエペルコルン氏 (むすび)	三〇一
無感覺という名の惡魔 ^{デエモ}	三二五
樂音の泉	三七
ひどく疑わしい話	三三四
病的興奮	三七四
青天の霹靂	四〇一

魔の山
I

第六章

變化

時間とは何か？ 一つの神秘である、——實體はないが全能な神秘である。時間は現象界の一つの制約で、空間のなかにある物體の存在と運動とにつなぎ合わされ、ませ合わされた一つの運動である。しかし、運動がないと、時間もないのだろうか？ 時間がないと、運動もないのだろうか？ さあ、いくらでも問いつづけたまえ！ 時間は空間の作用なのだろうか？ それとも、その逆なのだろうか？ それとも、この二つは同一のものなのだろうか？ さあ、どしどし問いつづけたまえ！ 時間は活動的で、動詞的な性質を持つている、すなわち、時間は「生じさせる」。いつたい時間は何を生じさせるのか？ 變化をだ！ 現在は當時ではなく、ここはかしこではない、と言うのも、二者のあいだには時間がはさまっているからである。しかし、時間を計る據りどころになる運動は循環的で、それ自體の外にはみ出すことのないものであるから、それは、ほとんど静止や停止と呼んでもよいような運動であり變化である、

と言うのも、當時が現在のなかに、かしこがここに、絶えずくり返されているからである。それから、終りのある時間や限りのある空間というようなものは、どれほど死物狂いになつて努力してみたところで思い描くことはできないのだから、わたくしたちは時間や空間を永遠で無限なものと「考える」ことに決めたのである、——そう決めたのは明らかに、そういう考え方のほうが、非常に都合がいいというのではないにしても、幾分でも都合がいいと思われたからである。しかし、永遠や無限を認めることは、終りや限りのある一切のものを論理的に計算的に消滅させること、ほとんど零にしてしまうことを意味しないだろうか？ 永遠の時間のなかで前後というものがありうるだろうか、無限の空間のなかで左右というものがありうるだろうか？ 永遠とか無限とかいうような間に合わせの假定は、距離、運動、變化などという概念と、どんなぐあいに調和するものだろうか？ 宇宙における有限の物體の存在ということとだけでも、どんなぐあいに調和するものだろうか？ さあ、どしどし問いつづけてみたまえ！

ハンス・カストルプはそんなぐあいに、そのようなことを頭のなかで問いつづけた。彼の頭は、この上へ到着するとすぐに、そういう突拍子もない穿鑿に興味を持ちはじめ、その後、始末の悪いものではあるが、強烈な慾望

を満足させてからというものの、恐らくとくにそういう方面に對して鋭敏になり、向う見ずに穿鑿するようになったのである。彼はそういう疑問を自分で自分に提出したばかりではなくて、善良なヨオアヒムにも、また、はるかな昔から深い雪に埋もれている谷にも提出してみたのだが、もちろん、そのどちらからも答えらしい答えを期待するわけにはいかなかった、——どちらのほうから最も期待するわけにいかないか、それは言にくいことだったが、彼がそういう疑問を自分自身に提出したのは、それに對する答えを知らなかつたからにはかならない。ヨオアヒムはというと、こういう問題に興味を持たせることはほとんどできそうにもなかつた、と言うのも、ハンス・カストルプがいつかの晩にフランス語でそう言つたように、ヨオアヒムは低地で兵隊になることだけを考へていて、その希望がいまにも實現されそうに近づいてくるかと思つと、再びからかうように遠くへ消えてしまつたために、遂には憤激するようになり、最近では、強硬手段に出てこの希望との闘争にけりをつけようとする傾向さえ見せていたからである。實際、この善良な、辛抱強い、實直な、精勤と規律との權化のようなヨオアヒムが、發作的に反抗するようになって、「ガフキイ法」^{ラボラトオリウム}をのしつたりしたが、ガフキイ法というのは、下の實驗室（通稱「實驗」^{ラボル}）で患者の保有している菌の程度を調べて、それを表示するのに用いる検査法だった、つまり、分析検査をされた痰のなかに菌がほんの分散的に存在するか、または、無數に群がつて存在するか、そ

れがガフキイ番號の大小を決める、そして、そのガフキイ番號によつて萬事が決定されるのだつた。と言うのも、このガフキイ番號は、その番號に當る患者が豫期することのできる快癒のチャンスを完全に確實に示すもので、それによると、半年くらの「束の間のおとずれ」に始まつて「終身」という宣告にいたるまで——終身の宣告とはいふものの、時間的にはほとんど問題にならないほどの短期間であることが多かつたが、患者がまだここに滞在しなければならぬ月數、あるいは年數を、苦もなく決定することができたからである。つまり、このガフキイ法に對してヨオアヒムは反抗して、その權威を信ずることを公然と拒絶したのでつた、——全く公然と、「ベルクホッフ」の幹部にむかつて、というほどではなかつたが、従弟にむかつて、しかも食事中に拒絶したのである。「もう澤山だ、これ以上もう馬鹿にされないぞ」と彼は大きな聲で言つた、そして、濃く日に焼けたその顔に血がさした。「二週間前には僕はガフキイ二番で、ほんのすこし悪いだけで、上々の見込みだつたんだ、ところが今日は九番で、それこそ菌だらけで、平地のことなんかもう問題にならない。どんなぐあいになつてゐるのか、惡魔でもなければわかるまい、もう我慢ができないよ。上のシャッツアルプにある男が寢てゐる、ギリシアの百姓なんだが、アルカアディエンからよこされた男で、その代理業者が彼をここへよこしたのだ、——絶望的な患者で、奔馬性の症状だから、いまにも參りそうな様子なんだが、その男はこれまでまだ一度も痰

のなかに菌の出たことはないんだ。その反対に、僕がここへ来たときに全快して退院していつた、肥えふとつたベルギイの大尉は、ガフキイ十番で、菌がうようよよしていたんだが、それでいてほんの小さな空洞があつただけなんだ。ガフキイなんぞ眞平だよ！僕は決着をつける、家へ歸るよ、死んだつてかまわん！」そうヨオアヒムは言つた、そして、常に柔和で沈着な青年がこうも興奮するさまを見て、皆はいたく當惑した。ハンス・カストルプは、萬事を放棄して低地へ歸るといふヨオアヒムの威嚇を聞きながら、いつかの晩に第三者からフランス語で聞いたある言葉を思い出さずにはいられなかつた。しかし、彼は黙つていた、と言うのも、彼は、シュテエル夫人のように従兄にむかつて、僕の忍耐ぶりを模範にしたまえなどとは言えなかつたからだ、シュテエル夫人となると、實際ヨオアヒムに訓誡をたれて、そんなにひどくいきり立たずに、おとなしくして、わたくしの忠實な辛抱強さを手本にしなさい、このカロリイネは、いずれは完全にすつかり健康を回復した妻になつて夫のもとへ歸るために、この上で忠實に辛抱しつづけ、カンシュタットの我が家为主婦として好き勝手に振舞うことを我慢強く思いとどまつているのです、と言つたものである。しかし、ハンス・カストルプにはとてもシュテエル夫人のやり方にならおうなどとは思えなかつた、それはことに彼があゝの謝肉祭以來ヨオアヒムに對して良心にやましさを感じていたからだつた、——すなわち、ヨオアヒムとその話はいないものの、ヨオアヒムは疑いも

なくあの夜のことを知つていて、それを裏切りとでもいうような、脱營、背信とでもいうような行爲と見なしているにちがいないが、日に五回も二つのまるい茶色の眼で見られ、箸のころげたのにも笑う癖と向かい合い、オレンジ香水の匂いがかがされながら、それに對して嚴格に端然として眼を皿の上に伏せているヨオアヒムとしては、それだからこそあの夜のことを裏切り行爲とでもいうようなものと見なしているにちがいない、というのがハンス・カストルプの良心のやましい思いだつたのである……。それだけではない、ハンス・カストルプは、「時間」についての彼の思辨や見解に對してヨオアヒムが示した嫌厭のけはいにも、この軍人的な禮儀正しさが若干感ぜられて、それには彼の良心に對する非難が含まれているように思つた。ところで、ハンス・カストルプが優秀な寢椅子の上から同じく超感覺的な質問を提出した相手の谷、深い雪に埋もれている冬の谷はというと、その尖頭や圓頂や岩壁のつらなりや、茶と緑と淡紅とに色づけられた森また森は、靜かに流れてゆく地上の時間に包まれて、あるときは紺碧の空の下に輝き、あるときは濃霧に蔽いかくされ、あるときは夕陽に照らされて上のほうを薄赤く染め、あるときは月夜の魅惑的な美しさのなかでダイヤモンドのような硬い感じのきらめきを見せながら、時間のなかに黙りこくつて立つていた、——しかし、六カ月このかた、つまり、またたく間に過ぎざりしたものの、非常に長く思われる六カ月このかた、谷はいつも雪に蔽われていた、そして、療養客たちは

みんな、雪を見るのはもう澤山だ、雪はいやだ、雪を見た
いという気持は夏だけでも充分満たされたのに、こん度は
明けても暮れても雪ばかりで、雪の山、雪の褥、雪の斜面
だ、これはもう人間の力に餘るといふものだ、精神も心情
も殺されてしまふ、と言明した。そして、彼らは緑や黄や
赤の色眼鏡をかけたが、眼をいたわるためというよりは、
むしろ心をいたわるためだつた。

谷や山々はもう六カ月前から雪に蔽われているのだろ
うか？ いや、七カ月前からなのだ！ わたくしたちが
物語を進めているあいだに、時間もその歩を進めてい
る、わたくしたちがこの物語にさざけているわたくしたち
の時間ばかりでなく、はるか昔の時間、つまり、あの上の
雪の世界のなかにいたハンス・カストルプや彼と運命を同
じくする人々の時間も、その歩を進めている、そして、
時間は變化を生じさせるのである。すべてがいかに順調
に進んで、ハンス・カストルプの豫言通りになつていつ
た。ハンス・カストルプが謝肉祭の日に、「街」から歸る
途中で口早に豫言して、ゼテムブリーニ氏の怒りをまねい
た通りに進んでいつた、すなわち、夏至がすでに眼の前に
迫つてゐるというほどではなかつたものの、復活祭は白い
谷を通つて過ぎさり、四月がたけなわになつていつて、聖
靈降臨祭が視野にはいつてきた。やがては春になつて、雪
が解けはじめるだろう、——しかし、どの雪も残らず解け
てしまふのではあるまい。夏のあいだのどの月にも降る雪
は、根雪になることはまずないから、これは問題にしない

として、南の山脈の頂や、北のレティコン連山の峽谷には、
いつでも雪が残つていた。それにしても、近いうちに一年
の變り目が出て、決定的な革新をもたらすことを絶対に約
束してゐた、と言うのも、ハンス・カストルプがショオシ
ヤ夫人から鉛筆を借りて、あとでそれを彼女に返し、その
代りに別なものの、つまり、彼がいまポケットに入れて持
っている記念の品を所望してもらい受けたあの謝肉祭の夜か
ら、すでに六週間というものが過ぎ去つてゐたからであ
る、——それは、ハンス・カストルプが最初この上に滞在
するつもりにしてゐた期間の倍に當る期間だつた。

ハンス・カストルプがクラウドニア・ショオシャと知り
合ひになつて、精勤なヨオアヒムが彼の部屋へ歸つたより
もはるか後刻に自分の部屋へ歸つていつたあの晩から、實
際にもう六週間というものが過ぎ去つてゐた。その翌日に
ショオシャ夫人が旅立つていつてから、六週間が過ぎ去つ
ていたのである。彼女の旅立ちとは最後のものではなく
て、はるかな東のコオカサ山脈の向うにあるダアゲスタ
ンへ、彼女は暫くの豫定で旅立つたのだつた。この旅立ち
が暫くの豫定のもので、決して最後のものではないこと
と、そして、ショオシャ夫人がまた歸つてくるつもりでい
ること、——いつになるかわからないが、いつかはまた歸
つてくるつもり、というかまたは、歸つてこなければなら
ないのだということ、それをハンス・カストルプは直接に
ショオシャ夫人の口から保證してもらつてゐたのだが、そ
の保證の言葉は、すでに物語つたあのフランス語の對話の

なかで言われたのではないから、わたくしたちが時間が結びついているこの物語の流れを中断して、時間だけを、つまり、時間を純粋な時間として流れ去らせながら、わたくしたちのほうでは沈黙していたあいだに言われたものである。いずれにしても、ハンス・カストルプ青年は、三十四號室へ歸る前に、そういう慰めになる確かな約束の言葉を聞いたのだつた、と言うのも、その翌日には彼はもうシヨオシャ夫人とは一言も言葉を交わさなかつたし、二度だけ遠くから見たほかは、ほとんど彼女の姿を見なかつたからである。一度は晝食のときで、青い毛織のスカーフに白い毛絲のスウェエターを着た彼女が硝子戸をガチャン・ピシャンと閉めながら、可愛らしい忍び足でもう一度自分の食卓へ歩いていつたのだが、そのとき彼の心臓は張り裂けんばかりに鼓動して、もしもエンゲルハルト嬢が鋭く見張つていなかつたなら、彼はすぐにも兩手で顔を蔽つたことだつたらう、——もう一度は、午後三時に彼女が発發するときで、彼は實際にその場に立ち會つたのではなく、車寄せを見おろすことのできる廊下の窓からその場の様子をながめていたのである。

出發の場の光景は、ハンス・カストルプがこの上に滞在しているあいだにもう幾度か見た通りにくりひろげられた。糧が馬車かが車道の寄附にとまつている。馭者と小使とがトランクを乗物にくくりつける。療養客たち、つまり、全快してか、しないでか、生きるためにか、死ぬためにか、いずれにしても低地へ歸ろうとする人の友人たちや、ま

た、こういう出来事から刺戟を受けようとして、療養勤務をさぼっているただの見物人たちが、玄關の前に集まつている。フロックコートを着た管理所の係員が一人、ときによると醫者たちまでが姿をあらわす。それから出發する當人が出てくる、——たいていは顔を輝かせて、好奇心から集まつている人々やあとに残る人々にむかつてねんごろに挨拶をし、出發という冒險のためにその場ではいかにも元氣にあふれている……。さて、この度は、出てきたのはシヨオシャ夫人で、微笑しながら、腕に一杯の花を抱えて、毛皮をあしらつた長い粗い地の旅行マントにくるまり、大きな帽子をかぶつて、くぼみ胸の同國人ブリギン氏を同伴して出てきたが、ブリギンは彼女の旅に暫く同行するのである。出發する誰もがそうであるように、彼女もうれしげに興奮している様子だつた、——出發する人はみな、醫者の承諾を得て出發するのか、それとも、ただ絶望するほど飽き飽きして、責任は自分で負うことにし、良心にやさしさを感ぜながら滞在を打ち切るのか、そういうことには全く關係なしに、生活を変えろというだけで興奮するのである。彼女の頬は紅潮していて、膝を毛皮の膝掛にくるんでもらうあいだも絶えず何か喋つていたが、多分ロシア語で喋っているものらしかつた……。シヨオシャ夫人の同國人や食卓仲間の人々だけではなく、ほかの客も多數その場に顔を見せていた。ドクトル・クロコフスキは心からの微笑をもらしながら、髭のなかに黄色い齒をのぞかせていたし、まだ花を贈る人もいて、例の大叔母さんは、彼女がい

つも「小菓子」と呼んでいる菓子、すなわち、ロシア式マ
アマレドを贈物にしたが、あの女教師やマンハイム人も
そこに立つていた、——マンハイム人のほうはすこし離れ
たところに立つて、陰鬱な様子でうかがい見ていたが、そ
の悲しげな眼はベルクホッフの建物を這いのぼつていつ
て、廊下の窓邊にハンス・カストルプの姿を認めると、陰
鬱そうにじつとその姿を見つづけていた……。ペエレンス
顧問官はそこに出ていなかた。明らかに彼はもう別の私
的な機会をとらえて、出發するシヨオシャ夫人に別れを告
げたものらしかつた……。それから、集まつた人々が手を
振つたり呼びかけたりするなかで、馬が軋きはじめたが、
シヨオシャ夫人も、櫓の前進する反動で上體を背後のクッ
ションへ倒すような姿勢になつたあいだ、微笑しながら、
その斜めなりの眼をもう一度ベルクホッフの建物の前面に
走らせ、ほんの一瞬間ハンス・カストルプの顔に注いだ……
。あとに残されたハンス・カストルプは、鈴を鳴らしな
がら車寄せにつづく道路を「村」のほうへ滑りおりてゆく
櫓をもう一度見ようものと、顔面蒼白のていで自分の部屋
の張出縁へ急いだが、それから、くずおれるように腰を椅子
子におろして、胸のポケットから記念の品を取り出すのだ
つた。彼が手に入れたその擔保の品は、こん度は赤褐色の
鉛筆の削り屑ではなくて、細粹に入れた小さな板、一枚の
ガラス板だつたが、光にかざして見ると、そのガラス板に
何かが見えてくる、——それはつまりクラウディアの内部
寫眞で、顔は寫つていなかたが、肉のやわらかな形によつ

て薄く朦朧とかこまれた上體のしなやかな骨格を胸腔の諸
器官と一緒に見てとることができたのだつた……。

クラウディア・シヨオシャが旅に出ていつてからも、時
間は變化を生じさせながら過ぎ去つていつたが、そのあい
だに彼は幾度彼女の内部寫眞をながめては、それを唇へ押し
當てたことだつたらう！ 時間は、たとえば、クラウデ
ィア・シヨオシャと空間的に遠く離れたこの上の生活に慣
れるという變化を生じさせたが、それも、想像したよりは
早くそういう變化を生じさせたのである、と言うのも、こ
の時間は、慣れさせるということに特別ぐあいのいい性質
を持つていた上に、そういう目的で割りふつてあつたから
である、ただし、慣れるとは言つても、慣れないというこ
とに慣れるだけの話だつた。盛り澤山な五回の食事の初め
にかならず聞かされたあのガチャガチャ・ピシャンという
騒音は、もはや期待するわけにはいかなかつたし、もう起
りもしなかつた。シヨオシャ夫人は、いまは、どこか別
の、非常に遠く離れた土地でドアを鳴りひびかせていたの
である、——この仕種は、時間が空間のなかにある物體に
結びついてませ合はさつていけると同じようなぐあい
に、彼女の存在と彼女の病氣とに結びついてませ合はさつてい
る本質的な現われで、恐らく、それこそは彼女の病氣にほ
かならなかつたのである……。しかし、彼女は、姿は見え
ず居合わせもしなかつたが、それでいながらハンス・カス
トルプの氣持にとつては、姿は見えないながらもその場に
居合はすというような存在だつた、——彼女は、彼があ

始末の悪い放埒甘美な瞬間に、つまり、低地ののどかな小唄などにはふさわしくないような瞬間に、認識して所有したこの土地における彼の守護神、その内部寫眞を彼が九カ月以来非常な要求を課されている心臓の上に抱いて持ちまわっている守護神なのだった。

あの瞬間には、彼は口をふるわせて吃りながら、外國語や母國語で、半ば無意識に、半ば息詰まりそうになつて、いろいろと放埒なことを言つたのだった。それらの提案、申出、突飛な構想、計畫などは、當然のことながら全然同意してもらえないままになつたのだが、——たとえば、守護神である彼女のお供をしてコオカサス山脈の向うまで行こうとか、一足遅れて出發して、守護神である彼女が自由に居所を選ぶ氣まぐれのままに次ぎの居所として選んだ場所では彼女を待ち合わせ、その後はもう決して彼女と別れないことにしようとか、そのほかいろいろ無責任なことを彼は言つたのである。この單純な青年が、この深刻な冒險から獲得したものは、擔保の影像ともいへば内部寫眞と、ショオシャ夫人が彼女に自由を與える病氣の指圖するがままに、遅かれ早かれ、ここへ四度目の滞在をするために歸つてくるだろうという、多分そうなるかも知れないという程度の可能性だけだった。しかし、遅かれ早かれというのがいつのことになるにしても、——そのときにはきつとハンス・カストルプは「とつくの昔にどこか遠いところへ立ち去つてしまつている」だろう、ということが別れのときにもまた言われたのだった、そして、この豫言の

輕蔑的な意味をそのまま受けとらずに、もつと堪えやすいものにするためには、ある種の事柄が豫言されるのはそういう事柄が起るようにするために豫言されるのではなくて、起らないようにするために、言わば惡魔祓いの意味で豫言されるのだ、ということを考えなければならなかつただろう。この種の豫言をする人は、未來がどんなかたになるかを豫言することによつて、未來を嘲笑し、未來をして實際その豫言通りのかたちになることを恥づかしがらせるのである。それに、あの守護神は、すでに物語つた對話のなかでも、また、そのあとでも、ハンス・カストルプのことを「小サナ浸潤箇所ノアル小市民」と呼んだし、そういう呼び方はゼテムブリイニの「人生の厄介息子」という言い方の翻譯のようなものだったのだが、そうなるというと、この二つの本質的な要素のうちのどちらが強いことになるか、市民的要素か厄介息子の要素か、ということが問題になるのだった……。また、あの守護神は、自分自身が何度か出發していつてはまた戻つてきたということ、従つてハンス・カストルプにしても適當なときにはまた戻つてこないともかぎらぬということを、考慮に入れたかつたのである、——もつともハンス・カストルプが相變らずこの上に腰をすえていたのは、言うまでもなく、二度と戻つてくることがないようにするためで、それが彼の滞在の理由であることは、多くの療養客の場合と同じように明確なことだった。

謝肉祭の晩の擲擲的な豫言が、一、つの中した、つまり、ハ

ンス・カストルプの熱曲線が悪くなったのであつて、曲線は當初ギザギザした線になつて急角度に上昇し、彼はそのギザギザの線を喜び祝うような氣持で記入したのであつたが、その後いくらか下降してからは、臺地のような高い平らな線になつて、わずかな起伏の波を見せはしたものの、ずつと持續的に、これまで慣れつこになつていた熱曲線の平面よりも高いところを走りつづけたのである。それは異常體溫で、顧問官の言うところによると、高さの點でも頑固さの點でも局部の現状とは一向に釣り合ひのとれないものといふことだつた。「お見かけによらず毒が多いんですね、あなたは」と彼は言つた。「では、ひとつ注射をやらかしてみましよう。きつと効能がありますよ。三、四カ月もすれば、あなたは水中の魚みたいになる、かく申す拙者の豫想通りになるとしてですがね」そんなわけでハンス・カストルプは週に二度、水曜日と土曜日とに、朝の散歩の直後に下の「實驗」へ出頭して、注射をしてもらうことになつた。

二人の醫者のどちらかが、この注射という方法をほどこしてくれて、ベエレンスがやつてくれるか、クロコフスキイがやつてくれるかはそのときの都合次第だつたが、顧問官のやり方は名人藝で、アツという間に、針を刺すと同時に注射してしまふのだつた。とにかく、彼はどこでもおかまいなしに針を刺したので、ときどきたまらないほどの痛い目に會ひ、針の刺さつたところがいつまでもひりひりして硬くなつてゐる始末だつた。それに、この注射は有機體

全體をひどく疲勞させるような作用があつて、スポーツのようなことで大活躍をしたときのようには神經系統をゆすぶつた、そして、それはこの注射が持つてゐる力を證明するもので、注射の直後暫くは熱がかえつてあがるのも、この注射の力を證據立てるものだつた。顧問官はこの注射の作用がそういうぐあいになることを豫言していたのである、そして、實際いつもその通りになつて、豫言された現象については何も異議を唱えるべき點はなかつた。注射の處置そのものは、順番が廻つてきさえすればすぐに済んでしまひ、またたく間に解毒劑が、大腿であれ腕であれ、皮下に注射されてしまふのだつた。しかし、ときどき、顧問官が喫煙過度のための憂鬱に見舞われていなくて、話をする氣があるというときには、注射の機會にすこし話し合うことがあつたが、その會話をハンス・カストルプはたとえば次ぎのように仕向けてゆくのだつた。

「僕はあの、お宅でコオヒイを御馳走になつて楽しかつたときのことを、いまでもよく思い出します、顧問官さん、去年の秋のことですよ、偶然そんなふうになつたのでした。つい昨日も、あるいはもうすこし前のことだつたかも知れませんが、僕は從兄にその話をしました……」

「ガフキイ七番」と顧問官は言つた。「從兄さんの最近の検査の結果です。あの青年はどうしても毒が消えそうにない。それなのに、彼は、ここから去つてサアベルを引きずつて歩きたいというわけで、最近では從來にないくらいわたしをこづいたり悩ましたりしています、まるで子供です

よ。これまでに過ごしたわずか十五カ月が、あたかも永劫だともいうように、どなりつけるんですからね。何が何でもここから去るとおつしやる、——あなたにもそう言いましたか？ あなたからひとつ彼の良心に訴えていただくんですな、あなたのお考えでそうするんだというふうにして、しかも力をこめてですよ！ あの男が、早まつて、地圖の右上にあるあなたがたの御郷里の情趣豊かな霧を吸おうものなら、それこそ雲散霧消してしまいますからね。ああいう大言壯語の徒は脳味噌をしこたま持つてゐる必要はないが、あなたはもつと分別のある人間、文民、市民的教養の持主なんだから、あの大言壯語の先生が馬鹿げたことをしでかさぬうちに、先生を正氣に戻してやるべきです」「そうしますとも、顧問官さん」と、ハンス・カストルプは話の梶をはなさずに答えた。「彼がそんなふうには反抗しようものなら、何度でも正氣に戻してやります、それに、彼だつて道理には従うだろうと思ひますからね。しかし、眼にうつる例が、かならずしも最上の例ばかりではありませんからね、あれが害になるんですよ。始終誰かが出發してゆきます——低地へむかつて出發してゆきます、自分勝手に、本當の資格なぞなしにですよ、それなのに、本物の出發でもあるかのようにお祭り騒ぎですからね、弱い性格の者には誘惑になりますよ。たとえば最近……最近出發したのは誰でしたかしら？ 婦人です、上級ロシア人席の、シヨオシャ夫人ですよ。ダアゲスタンへ行く、というような噂でしたがね。で、そのダアゲスタンというところ、僕

はその氣候を知つてゐるわけではありませんが、とにかく地圖の右上にある水都ハムブルクよりはましな氣候なんですね。しかし、そこはこの上の僕たちから見ればやはり低地ですよ、地理的に言えば山地かも知れませんがね、僕は地理にはあまり詳しくないんですが。それで、全快したわけでもないのに、そんなところでいつたいどうして暮らそうというんですかね、根本概念が缺けていて、誰一人この上の僕たちの生活法を知らないし、安静療法や檢温のやり方も心得ていないという土地で？ とにかく、彼女はどつちみちまたここへ歸つてくるというんですよ、何かの序に僕にそう言いましたからね、——いつたいどうして彼女の話になどなつたのでしょうか？ そうだ、あのとき僕たちが庭でああなたにお會ひしたのでしたね、顧問官さん、覚えていらつしやいますか、むしろ、あなたが僕たちにお會ひになつたと申してもよいわけですよ、と言うのも、僕たちはベンチに腰かけていたのですからね、どのベンチだったか僕はいまでも覚えてますよ、何なら、あのとき僕たちが腰かけて葉巻を吸つていたベンチを、僕は間違ひなくあなたにお教へすることもできますよ。ただし、葉巻を吸つていたのは僕だけでした、従兄はどういうわけか煙草を吸わないのですからね。あなたもちやうど葉巻を吸つておいででした、で、あなたと僕とがおたがいにめいめいの葉巻をすすめ合つたのです、いまそれを思い出しましたが、——あなたのブラジル葉巻は實にすばらしい味でしたが、あれは若い馬を相手にするようなつもりにならなければな

らないですね、そうしないと、あなたがいつかあの小さな輸入葉巻を二本吸つたあとで、胸を波打たせながら踊りつつ退場ということになりかけたような、とてもない目に會いかねないというわけです、——無事にすんだから、こうしてお笑い種にしていられますがね。それはそうと、マリヤ・マンチイニを僕は最近また二、三百本ブレエメンから取寄せました、この葉巻は僕の愛着おくあたわさるもので、あらゆる點で僕の性に合うんです。でも、確かに、關稅や郵稅のために高いものになるのがかなりこたえます、でも、もしこん度の診察であなたにまたこの滞在期間を相當増されるようなことになりましたら、顧問官さん、僕もひとつ思い切つて、結局はこの土地の葉巻に轉向しますよ、——飾窓になかなか見事なのが並んでいますからね。それから僕たちはあなたの繪を見せていただきましたが、まだ昨日のこのように覺えています、非常に面白く拜見いたしました、——あなたの油繪具の大膽なお使い方には、それこそ魂消^{たまげ}てしまいましたよ、あんなやり方は僕にはとてもできませんからね。あのとき僕たちはショオシャ夫人の、皮膚がすばらしくよく描けている肖像も見せていただきました、——僕は感激した、と言つてもいいほどのです。あの頃僕はまだモデルになつた彼女と知り合ひの仲ではなくて、ただ顔や名前を知つていただけでした。その後、彼女がこん度出發する直前に、僕は彼女と個人的にも知り合ひになつたのです」

「何をおつしやる！」と顧問官は答えた、——前のことを

言つてもよいならば、ハンス・カストルプが最初の診察を受ける際に、熱もすこしあると告げたときに、顧問官はこれと同じ返事をしたことがある。そのほかには顧問官は何も言わなかつた。

「本當ですよ、ええ、本當に知り合ひになつたんですよ」とハンス・カストルプは保證した。「經驗から言いますと、この上で知り合ひをつくるのは決して容易なことじやありませんが、しかし、ショオシャ夫人と僕とは、いよいよの瞬間になつてやつと知り合ひになるような運びになつて、おたがい話をし合つて……」ハンス・カストルプは齒のあいだから空氣を吸ひこんだ。注射針を刺されたのである。「ウー」とばかりに彼は顔をうしろへそむけた。「針のさわつたのが偶然にどこか非常に大事な神經だつたようですよ、顧問官さん。ええ、本當に、地獄みたいな痛み方です。ありがとう、そうやつてすこしマッサアジしていただく、よくなるでしょう……。おたがい話をし合つて僕たちは親しくなつたんです」

「そう！——それで？」と顧問官は言つた。彼は頷きながらそう尋ねたのだが、その顔つきは、非常な賞讃の返事を豫期して、自分の問いが同時にその豫期される賞讃を自分の經驗から是認することにもなつていふという人の顔つきだつた。

「僕のフランス語はすこしたどししかつたらうと思ひます」と、ハンス・カストルプは逃げを打つた。「フランス語を使う機會なんかほとんどなかつたんですからね。しか